「ものなら」について考える

増　倉　洋　子

はじめに

1．日本語における条件表現

日常言語の中には、人間の外界に対する認識のプロセスを示す様々な複合表現が存在する。その中でも特に条件表現（注１）は身の回りに生起する外界の事がらを話者がどう認識したかを反映する複合表現の一つとして、もっとも頻繁に使われ、がゆえに注目に値するものといえる。

以下のものは川端康成『雪国』の一節である。

①「国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。」

これを試みに別種の条件表現を用いて書き直してみる。

②「国境の長いトンネルを抜けたら、雪国であった。」

②の表現はもちろん日本語として間違ったものではない。しかし読者が文から受ける印象は、かなり違ったものになるであろう。②の場合、読者はトンネルを通り、そこに雪国を見る語り手の体験的視線を感じるであろう。それと比べて①の場合、そのような語り手の存在は意識されない。この文では、あたかも眼前に広がる風景の展開がカメラレンズの目を通して見るように追体験される。語り手の存在は展開する風景の後方に押しやられてしまう。読者に印象付けられるのは、トンネルを抜けるとともに眼前に広がる雪国の風景である。

「～たら」ではなく、「～と」を用いた場合にのみ、このような表現上の効果を生むことができるのはどうしてであろうか。これは「～と」を用いた条件表現の持つ性質によるところが大きい。「春が来ると、花が咲く。」「梅雨になると、雨が降る。」の文に見られるような「～と」条件表現は、前件・後件の因果関係に対して主体の主観的な認識・判断が投影されていない。つまり、「～と」を用いた条件表現の機能は、前件（注２）と後件の因果関係が表現主体の判断から独立して、より客観的に成立すると認識された場合に、多く用いられるものである。『雪国』の文に見られた外界の客観描写のような表現効果は、このような「～と」を用いた条件文の機能によって生み出さ

れたものと言えるのではないか。

次に「～なら」を用いた条件表現をみる。

③「きたなくなった年数の多い者を先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。」（夏目漱石・『こころ』）

④「――もし本当にあなたのいのちより他の人間のいのちが大切だと思ってたのなら、それだけの手だてをとるべきではなかったのか。」（大江健三郎・『救い主が殴られるまで』）

この二つの文が明らかに「～と」を用いた条件文と違うのは、まず後件に話者の意志表現がきているということであろう。③に関しては婉曲な断定表現・④に関しては勧告の表現をとっている。この意志・意向の前提となるものは、前件に述べられている。③では「きたなくなった年数の多いものを先輩と呼ぶ」こと、④では「本当にあなたのいのちより他の人の命がたいせつだと思っていた」ことである。この判断を前提として話者は後件の結論を導き出している。しかしこの前件の判断は話者自らが下したものなのであろうか。答は否である。「きたなくなった年数の多いものを先輩と呼ぶ」という判断は、聞き手あるいは、世間一般のものであろうし、「あなた（聞き手）のいのちより他の人の命がたいせつだ」という判断は聞き手の判断である。話者は自己の判断の不在なままに、聞き手の判断を前提にして自己の意向を述べているといえる。

このことを話者の認識という点から捉え直すと、どういうことになるのであろう。話者は、後件を述べるに際しての基準・前提となる外界の認識を自らの責任で行っていない。つまり聞き手の認識に基づき・聞き手の判断に依って自己の意向を述べている。「～なら」を用いた条件表現は、以上のような表現機能をもつものである。

最後に「～たら」「～ば」による条件表現を考えてみる。

⑤「現地に着いたら、連絡します。」

⑥「現地に着けば、連絡します。」

この二つを述べるときの話者の状況認識の違いはいかなるものであろうか。まず、⑤の「～たら」を用いた条件形式の場合、話者は現地に着くことをある程度確信していることが伺える。英語に訳せば［when］が使えそうな状況のもとでの発言であろう。それに対して⑥の場合は現地に着くことに対してそのような確信をもっていない。何かの事情で「着くか着かないか」が危

ぶまれるという仮定のもとでの発言であろう。

2．条件表現習得の困難さ

以上のように日本語における条件表現は、話者が状況をどのように認識・判断するかによって他の言語には見られない、多様な類義表現を有する。今まで見てきたように、条件表現の前件を表す節が「～と」「～なら」「～ば」「～たら」のように多様な形式で表され、しかもこれらの形式の間には、どれを用いても大差のないもの、別の表現を使うと誤用になるもの等、微妙な使い分けが存在する。このような実態を有する条件表現の習得は外国人学習者によって容易なものではない。以下に中国語との比較を用いて実態を述べてみる。中島悦子（注3）は、川端康成『雪国』を用いた「～と」を中心とした日中条件表現の対称研究の中で以下のような事例を挙げている。

①
・「温泉場に下りてくると、芸者を呼んでくれと言った。」
・「一到温泉浴場、就讓人去給他叫芸妓。」

②
・「ここへ来ると、急に酔いが出る。」
・「一来到这里　就酔了。」

③
・「女はふいにあちらを向くと、杉林の中にゆっくりはいった。」
・「女子突然転过身子、慢歩走进杉树从中」

④
・「書き出せばどうしても長くなることがある。」
・「一下笔就写的很長」

①・②・③の事例を見ると、同じように、人物の連続的動作を表すような「～と」の事例においても、対応する中国語表現が異なっていることに気づく。逆から考えると中国語においては異なる表現に対して、日本語では同じ「～と」条件形式を用いることを意味する。

④の場合も併せて考えると事態はもっと複雑になる。日本語では「～ば」であり、「～と」とは違う表現形式に関しても中国語では「一～就」という同一の表現形式で表すということである。見方をかえれば、「一～就」というひとつの表現形式を、ある場合には「～と」の条件形式に、ある場合は「～ば」の条件形式に使いわけなければならないようである。

他の言語を母語とする学習者が日本語条件表現を習得する際の困難の一端が伺える。

以上のような背景のもとに条件表現の研究は日本語教育の分野でも盛んに

論じられてきた。

「ものなら」に関する拙稿は、その条件表現「～のなら・～なら」と「～なら」を含む文中表現「～ものなら」の関係を探り、併せて「ものなら」を使用する際の話者の状況認識の実態を明らかにしようとするものである。

Ⅰ.「ものなら」をめぐる問題意識

＜接続助詞＞｛形式名詞「もの」に指定の助動詞「だ」の仮定形「なら」がついて一語の助詞化したもの｝

① ｛意志・推量を表す助動詞「う」「よう」の連体形につく。｝それがひとたび成立すると、ことの成り行きが大変なことになる。そういう仮定条件を表すのに用いる。もし万一、～ならば

② ｛原則として可能を表す動詞あるいは助動詞の連体形につく｝順接の仮定条件を表すのに用いる。多く不可能であると思われるような条件を示すときに用いる。『学研国語大辞典』

①「う・よう」形について、それがきっかけでなりゆきが大変なことになる、という仮定の順接条件

②実現が難しい事がらを仮定した順接条件『新明解国語辞典』

①仮にある事がらを言って、本当にそうなれば、その結果はよくないことになるというような二つの文を結ぶ。

②「～できる」という可能の言葉について、「できないと思うが、したければしてみなさい」という意味を表す。『基本語用例辞典』

上記のものは、主な辞書の中にみられる「ものなら」の説明である。「の」も「もの」も同じく形式名詞の働きをする品詞であるにも関わらず、「ものなら」は、前件に動詞の「う・よう」形・可能の表現を用いるというような制約をもち、且つ文全体が表現できるニュアンスも限定されたものとなっている。「のなら」と「ものなら」には、なぜこのような形式上・表現上の違いが生じるのであろうか。両者の比較を試みる中で、「ものなら」と「のなら・なら」との関係を探り、併せて上記辞書記述にあるような表現上のニュアンスがなぜ生ずるかについて、考察してみようと思う。

（以下、辞書中の①の説明に該当するものをモノナラ文①と呼び、辞書中の②の説明に該当するものをモノナラ文②と呼ぶ。また、辞書の記述にはないものであるが、動詞の「う・よう」形及び可能表現以外の形に付く「ものな

ら」をモノナラ文③と呼ぶ。そして、条件文を形成する「なら」をナラ文、「のなら」をノナラ文と記述する。)

Ⅱ．モノナラ文①に関して

1．用例（注4）

①「官員の口てッたッてチョックラチョイット有りやよし無からうものならまた何時かのやうな憂い思ひをしなくッちゃアならないヤネ。」

（二葉亭四迷・『浮雲』）

②「――阿父の前で這麼事　一寸でも言はうものなら　それこそ甚麼に叱られるかしれませしねえが、黙って居て下せえまし。」

（川上眉山・『観音岩』）

③「ポチが跟とを追う。うッかり出ようものなら、何処迄も何処迄も随いてきて逐ったって如何したって帰らない。」

（学研　国語大辞典・二葉亭四迷『平凡』）

④「しかも吾輩のほうで少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い回して迫害を加える。」　（夏目漱石・『吾輩は猫である』）

⑤「みだりに我物と心得て、私用に費そうものなら、いつか「天道」に泄れ聞こえる時がくる。」　（現代国語例解辞典　島崎藤村・『夜明け前』）

⑥「このあいだこしらえた旦那様の外套でもとられようものなら、それこそ騒ぎでございましたね。」　（夏目漱石・『門』）

⑦「その話も、もっともなことだし、うっかりことわろうものなら相手をおこらしてしまいそうな意気ごみなので、北見のおじさんはこころよく、その厚意をうけとったのであった。」

（『現代語の助詞・助動詞ー用例と実例』　昭和24·12『少女クラブ』）

⑧「うちの子供が外へ出て、下の階級の言葉を覚えて来ようものなら、お母さんが喧しく訂正している。」

（『現代語の助詞・助動詞ー用例と実例』昭和24·12『文芸春秋』）

⑨「うっかり克己さんに口をきこうものなら後で梅ちゃんにひどい目に逢うから、気を付けなさいよ。」

（『現代語の助詞・助動詞ー用例と実例』昭和25·2『主婦と生活』）

⑩「あなたが若し、彼らに向って、新しい戦争のおこる可能性でも語りでもしようものなら、あなたの目玉を呉れんず勢いでいきり立つのですから、

不思議です。」(『現代語の助詞・助動詞ー用例と実例』昭和25·2『新潮』)

⑪「電車の二停留所もあろうものなら、まず『お車』」

(婦人朝日　昭和31·12『現代雑誌九十種の用語用字 (3)』)

⑫小さい路地まで車が遠慮もなくはいってくるのだから、小説のことなど考えて歩いていようものなら、事故をおこしてしまう。」

(大原富枝・『柊の花』)

⑬「ーー地方から東京の私大へ入れて下宿させようものなら、大学の4年間だけで800万円から900万円かかる。」(1985·4·30『朝日新聞』天声人語)

⑭「そんな事を言おうものなら、ひどくおこるだろう。」(『岩波国語辞典』)

⑮「それを、言おうものなら、事だ。」(『日本語大辞典』)

⑯「そんなことをしようものなら、たいへんだ。」(『基本語用例辞典』)

⑰「うそをつこうものなら、二度と口をきかない。」(同上)

⑱「わたしにだまって、かってなことをしようもんなら決してゆるしませんよ。」(同上)

⑲「だまそうものなら、ただではおかない。」(『詳解国語辞典』)

⑳「雨がふろうものなら、一面水びたしになる。」(『現代国語例解辞典』)

2．用例に見られるモノナラ文①の特徴

(1)　前件に見られる特徴

例示の「でも」「など」との共起　文例②④⑥⑩⑫・五例

(2)　後件に見られる特徴

A．予想される事態の描写と思われるもの

②「どんなに叱られるかしれませんがねえ」

③「何処までも何処までも随いてきてーー」

④「家内総がかりで追い回して迫害を加える。」

⑤「いつか『天道』に泄れ聞こえる時が来る」

⑥「それこそ騒ぎでございました・」

⑦「相手をおこらしてしまいそうな意気ごみなのでーー」

⑧「お母さんが喧しく訂正している。」

⑨「梅ちやんにひどい目に逢うから気を付けなさいよ。」

⑩「あなたの目玉を呉れず勢いでいきり立つーーー。」

⑪「まずお車」

⑫「事故を起こしてしまう。」

⑬「大学の4年間だけで800万から900万かかる。」

⑭「ひどくおこるだろう。」

⑮「事だ」

⑯「たいへんだ。」

⑳「一面水びたしになる。」

B．話者の意志・意向を表すと思われるもの

①「また何時かのやうな憂い思ひをしなくッちゃアならないヤネ」

⑰「二度と口をきかない。」　⑱「決してゆるしませんよ。」

⑲「 ただではおかない。」

以上のことから後件にくるものは、A「予想される状態」を述べる文と、B「話者の意志等」を述べるものの二つのグループに分けられるようであるそして調べた用例の限りではAのほうが多いということが言える。

3．次に「なら」「のなら」との関係を見るために用例を「なら」と「のなら」で置き換えてみた。

①「官員の口てッたッてチョックラチョイット有りやよし無からうものなら（無いなら／無いのなら）また何時かのやうな憂い思ひをしなくッちゃアならないヤネ。」

②「ーー阿父の前で這麼な事一寸でも言はうものなら（言うなら／？言うのなら）それこそどんなに叱られるかしれませしねえが、黙って居て下せえまし。」

③「ポチが跟とを追う。うッかり出ようものなら（出るなら／？出るのなら何処迄も何処迄も随いてきて逐ったって如何したって帰らない。」

④「しかも吾輩のほうで少しでも手出しをしようものなら（するなら／？するのなら）、家内総がかりで追い回して迫害を加える。」

⑤「みだりに我物と心得て、私用に費そうものなら（費すなら／？費すのなら）、いつか「天道」に泄れ聞こえる時がくる。」

⑥「このあいだこしらえた旦那様の外套でもとられようものなら、（とられるなら／？とられるのなら）それこそ騒ぎでございましたね。」

⑦「その話も、もっともなことだし、うっかりことわろうものなら（ことわ

るなら／？ことわるのなら）相手をおこらしてしまいそうな意気ごみなので、北見のおじさんはこころよくその厚意をうけとったのであった。」

⑧「うちの子供が外へ出て、下の階級の言葉を覚えて来ようものなら（来るなら／？来るのなら）、お母さんが喧しく訂正している。」

⑨「うっかり克己さんに口をきこうものなら（きくなら／？きくのなら）後で梅ちゃんにひどい目に逢うから、気を付けなさいよ。」

⑩「あなたが若し、彼らに向って、新しい戦争のおこる可能性でも語りでもしようものなら（するなら／？するのなら）、あなたの目玉を呉れんず勢いでいきり立つのですから不思議です。」

⑪「電車の二停留所もあろうものなら（あるなら／？あるのなら）、まず『お車』」

⑫「小さい路地まで車が遠慮もなくはいってくるのだから、小説のことなど考えて歩いていようものなら（いるなら／？いるのなら）、事故をおこしてしまう。」

⑬「――地方から東京の私大へ入れて下宿させようものなら（させるなら／？させるのなら）、大学の４年間だけで800万円から900万円かかる。

⑭「そんな事を言おうものなら（言うなら／？言うのなら）、ひどくおこるだろう。」

⑮「それを、言おうものなら（言うなら／？言うのなら）、事だ。」

⑯「そんなことをしようものなら（するなら／？するのなら）、たいへんだ。」

⑰「うそをつこうものなら、（うそをつくなら／うそをつくのなら）二度と口をきかない。」

⑱「わたしにだまってかってなことをしょうもんなら（するなら／するのなら）決してゆるしませんよ。」

⑲「だまそうものなら（だますなら／だますのなら）、ただはおかない。」

（『詳解国語辞典』）

⑳「雨がふろうものなら（ふるなら／？ふるのなら）一面水びたしになる。

（『現代国語例解辞典』）

以上のようにモノナラ文①は多くの場合にナラ文での言い換えが可能であるが、ノナラ文での言い換えは①⑰⑱⑲を除いては不自然と思える。これら４例は後件に話者の意志を表す場合であり、それ以外の16例は予想される事

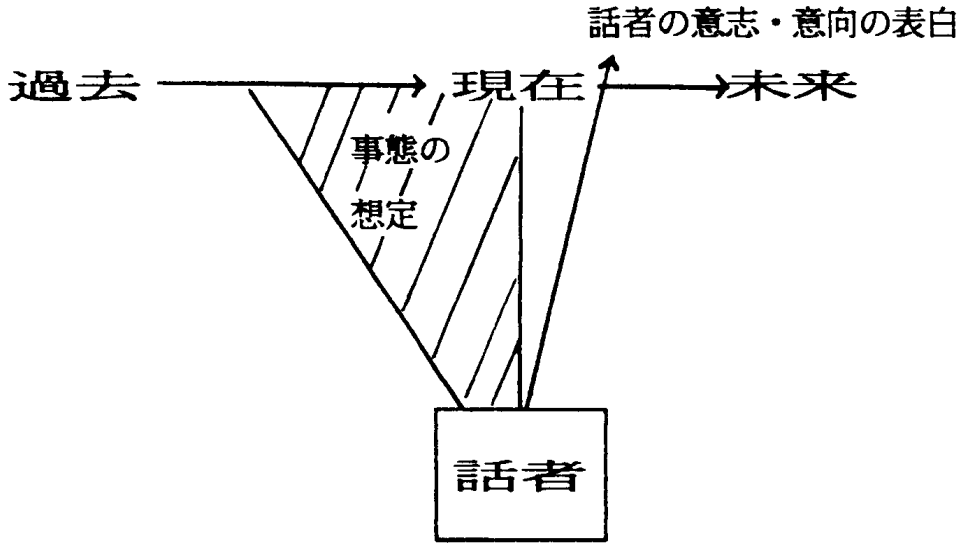
態を述べる文であった。検索された用例の80％以上が、後件で予想される事態を述べる文であるといえる。

このように「う・よう形＋モノナラ」のモノナラ文①には、後件に「予想される事態を述べるもの＝「『のなら』での言い換えの困難なもの、・『なら』でのみ言い換えられるもの」、後件に「話者の意志等を表すもの＝『のなら・なら』で言い換えられるもの」という対応関係が見られるようである。

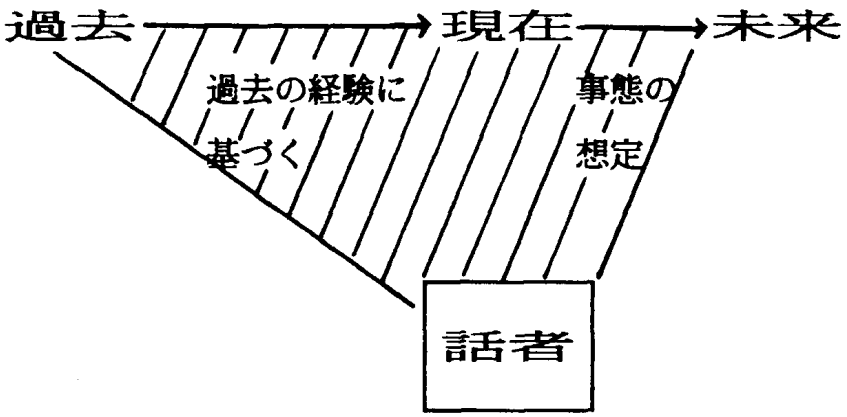
次に分類された各々に関して発話者の視点から考察を加えてみたい。（以下モノナラ文①で「後件に予想される事態を述べるもの」を「モノナラ文①のａ」、モノナラ文①で「後件に話者の意志等を表すものをモノナラ文①のｂと呼ぶ。）

まず用例の少ない「モノナラ文①のｂ」から検討して行く。

⑰「うそをつこうものなら、二度と口をきかない。」⑱「わたしにだまってかってなことをしようものなら、決してゆるしませんよ」のような文例の場合、話者は現在、個別具体的な状況に直面していると考えられる。例えば⑰の場合は聞き手に嘘をつかれそうな気配に、⑱の場合は、勝手なことをされそうな事態に直面している。この状況は、あくまでも実現されそうな気配であり、実のところがどうであるかわからない。しかし、話者はこのように前件を仮定し、この直面する状況に対して、どのような意志や判断をもって対処するかを述べている。これが「モノナラ文①のｂ」である。話者は現在の発話時点にたって、未来に起こりそうな事態を想定し、それに対する自己の意志を述べているといえる。（図示すると以下のようになる）



では、「モノナラ文①のａ」の場合はどうか。この場合、話者はそのような位置にいないと思われる。「モノナラ文①のａ」の前件も具体的に実現されたものではない。しかし前件にくる状況は、話者が直面している個別具体的なものではないと思える。たとえば、⑪「電車の二停留所もあろうものならまずお車」の文を例にとれば、前件の二停留所は二停留所に限ったものではない。それぐらいの距離という意味であろう。話者はここに語られている人物が「そのぐらいの距離のあるときには、いつもそう言った」という場面に何度も遭遇しているのであろう。その蓄積された経験をもとに「前件の状況のあるときには、多くの場合、後件の事態になる」ということをいっている。ここでは、前件と後件の結びつきは不可分であり、「前件の状況の成立を前提として後件の事態が起こる」ということを経験的に想定した文といえる。つまり前件のみを想定する「モノナラ文①のｂ」と違って話者の想定は文全体に及んでいる。



Ⅲ．モノナラ文②に関して

モノナラ文②に関しても、モノナラ文①と同様に「なら」と「のなら」での置き換えを試みてみる。（ここでは、用例と「なら・のなら」で置き換えた用例を別個に提示する煩雑さを避けるために、初めから「なら・のなら」で置き換えたものを列挙する。）

１．用例及び「なら・のなら」での置き換え

①「出来るものなら（なら／？のなら）三毛の代わりにーーあの教師の所の野良が死ぬとおあつらえ通りに参ったんで御座いますがね。」

（学研国語大辞典・夏目漱石・『我が輩は猫である』）

②「肉体の老いが操作可能なものならば（可能なら／可能なのなら）精神の老いは尚更、自在に操作出来なくてはなるまいと思う。」

（大原富枝・『柊の花』）

③「女御の君に、もしおつかえできるものなら（なら／のなら）あたし水くみだって便所掃除だってしますわ。」（田辺聖子・『源氏物語・男の世界』）

④「行けるものなら（なら／のなら）行ってみたい」（『新明解国語辞典』）

⑤「できるものなら（なら／のなら）私もアメリカへついて行きたい。」

（『現代国語例解辞典』）

⑥「やれるものなら（なら／のなら）やってみろ。」（『現代国語例解辞典』）

⑦「信じられるものなら（なら／のなら）、信じたい。」（『詳解国語辞典』）

⑧「ひとりで行けるものなら（なら／のなら）行ってみなさい。」

（『基本語用例辞典』）

⑨「おまえにやれるものなら（なら／のなら）やってみなさい。」

（『基本語用例辞典』）

⑩「そんなにたくさん食べられるものなら（なら／のなら）、食べてごらん

（『基本語用例辞典』）

⑪「それですませられるものなら（なら／のなら）、事は簡単だ。」

（『三省堂国語辞典』）

⑫「誰しも不幸や苦境に陥ることが避けられるものなら（なら／のなら）避けたいと思うだろう。」）（注5）

⑬「一人で暮らせるものなら（なら／のなら）、暮らしてごらん。」

⑭「子供時代にかえれるものなら（なら／のなら）、もう一度かえってみたい。」

⑮「逃げられるものなら（なら／のなら）、逃げてみろ。」

⑯「私の力で助けられるものなら（なら／のなら）、助けてもやるのだが。」

2．前件に見られる特徴

モノナラ文①の場合、例示の「でも」「など」等と共起するというような特徴が見られたが、モノナラ文②の場合は際立った特徴はない。」

3．後件に見られる特徴

自分の願望・意志を述べるもの

「～てはなるまい」「～たい　」「～ます。」
「～てやる」
他人に対する要求・命令等の働きかけをするもの
「～てみろ」「～てみなさい」「～てごらん」

以上のように、話者が発話する時点で何らかの情報や発言を受け、それに対する見解を述べるもの、また聞き手の行動を促す働きかけをするものが大多数である。そして大部分のものが「なら・のなら」で置き換えることができるといえる。

Ⅳ．モノナラ文①とモノナラ文②以外の用法

モノナラ文には、辞書に表記されている「う・よう形＋モノナラ」「可能の表現＋モノナラ」の他に以下のような用法もかなり多く存在する。

①「くっついて痛がる物なら（なら／のなら）狼の生まれ変わりだろう。取りついて離れねえなら狐さま」　（式亭三馬・『浮世風呂』）

②「耳できくものなら（なら／のなら）香をきくといふが能いけれど、鼻だからかぐ方がよかろうぜ。」　（式亭三馬・『浮世床』）

③「此場に成って然うとぼけなくッても宜いぢゃ有りませんか。寧そ別れるものなら－（なら／のなら）－綺麗に－－別れやうじゃ－－－有りませんか。」　（二葉亭四迷・『浮雲』）

④「そんなことでいいものなら（なら／のなら）、だれにでも出来るよ。
（『岩波国語辞典』）

⑤「二三度干物でも遣ったものなら（なら／のなら）、可ことにして、まつはって、からむも可けれど」　（日本国語大辞典・泉鏡花『化銀杏』）

このモノナラ文③に関しては、用例で挙げた範囲のすべてのものに付いてほぼ完全に「なら・のなら」でおきかえることができる。

以上のようなモノナラ文①・モノナラ文②・モノナラ文③の考察を通じて以下の点を指摘しておきたい。

1．モノナラ文①とモノナラ文②の中には、「のなら」で置き換えられるものと置き換えられないものが両者ともに存在する。モノナラ文③に関しては、ほぼ「のなら」に置き換えられるということが言える。

(1) モノナラ文①の中で、後件に「予想される事態の描写」の来る文は「のなら」で置き換えることが困難である。後件に話者の意志を表すものは置き換えが可能である。

(2) モノナラ文②は多くの場合「のなら」に置き換えることが可能である。

(3) モノナラ文③は、ほぼ全部、「のなら」での置き換えが可能といえる。

2.「のなら」で置き換えられないものの比率は、モノナラ文①のほうが高く、モノナラ文②のほうが低い。つまりモノナラ文②の方がより多く「のなら」での置き換えが可能である。以上のことから、モノナラ文①の場合、用法の中心を占めるのは「なら」でのみ置き換えることのできるものであり、モノナラ文②の場合は「なら・のなら」の双方で置き換え可能な用法が中心的なものと言えるようである。

最後にモノナラ文③の場合は、すべての場合に「のなら」での置き換えが可能であり「のなら」に書き換えても表現上の差異はほとんどないように思える。

V. ノナラに関して

それでは次に「のなら」に関して、「のなら」とは何なのか。「の」のつかない単なる「なら」との違いはいかなる点にあるのかを考察してみたい。

両者の違いに対し、これまでの研究を整理し、筆者の立場を明らかにしようと思う。「なら」に特徴的なものとしては、1973年に久野が「なら」に与えた「聞き手の断定」(注6)という性質が挙げられる。久野は「なら」の成立条件として、後件が話し手の判断・意志・決定・要求・命令を表すものであること、話し手が前件を、聞き手(あるいはの人一般)の断定として、それに完全に同意しないまま(すなわち自分自身はその成否に対する判断をくださないまま)、提出するものであることを挙げている。しかし、すべての「なら」に同じひとつの性質があてまるのかという点から研究は進展した。

これに対し蓮沼(注7)はナラをⅠ. 前件に他者の意向・主張の関与する場合とⅡ. 前件に他者の意向・主張の関与しない場合に分け、まとめの部分で次のようにのべている。

Ⅰ. ナラは他者(典型的には聞き手)の意向・主張と、それを根拠とする話し手の発話意図との(決断・判断・要求など)の関係づけを行うのを

その原形的な用法にもつ。(ナラⅠ)

Ⅱ．ナラには他者の意向・主張が関与しない用法がある。(ナラⅡ) これはある事態の真偽や実現可能性などに関してとりあえず可能な事態として話し手が前件を設定し、それを土台にして後件を導くといった共通の特徴をもつものである。

網浜(注8)もナラとカラに関しての論を述べるなかで

ナラｂ－事態成立の条件

ナラｃ－話し手の結論を導くための根拠

とナラを二つに分類している。ナラｂが蓮沼のⅡに当たり、ナラｃがⅠに当たる見解であろう。

また鈴木(注9)も「ナラ条件文の意味」の中でナラをノナラに置き換えられるものだけをナラ条件文として特立し、

「ナラ条件文の条件句は、主文のモダリティー対する条件となるものと、後句事態の成立に対する条件になるものとがある。前者が絶対テンスのナラ条件文であり、後者が相対テンスのナラ条件文である。」としている。

主文のモダリティーに対する条件となるものが蓮沼のⅠに該当し、後句事態成立の条件となるものがⅡに該当するであろう。

このような考えは田野村(注10)にも共通している。田野村は「なら」を「実情仮定の・なら」と「状況設定の・なら」に分類して以下のように述べている

「実情仮定の・なら」

「なら」という言い方事態が、ある実情がどうであるかということについての仮定を表現することを中心的な用法とするものである。つまり「実のところが～であれば」といった意味を表すわけである。このため「なら」がそうした意味を表すときには、「なら」と「のなら」は結果的にほとんど同義の表現になる。

「そんなに、気にいらないなら／気にいらないのなら、よせばいいのに。」

「状況設定の・なら」

ある事態が実現した状況を仮に設定して、その状況のもとでのことがらを表現しているのであって、実のところが現にどうであるのかを問題にしているのではない。ここでは「なら」は可能であるが「のなら」とするのはほとんど不可能である。

「道に迷ったなら／？迷ったのなら、誰かに尋ねなさい。」

筆者も、従来は「他者の意向・主張が関与する用法」の特徴が強調されたきらいがあったとの感想をもつので、この四者の区分には賛成である。また田野村は「実情仮定の・なら」と「状況設定の・なら」を形の上でも区分し前者をノナラで言い換えられるもの、後者を言い換えられないものに大別した。鈴木も「主文のモダリテーに対して働くもの＝ノナラでの置き換えが可能なもの」「後句事態成立の条件となるもの＝ノナラでの置き換えの不可能なもの」と田野村と同様に形の上での対応をうちだしている。しかし、ここで鈴木が田野村と違う点は、鈴木はノナラで置き換えられないものをナラ条件文とは認めていないという点にある。しかし、それでは、ナラ条件文でないものが、なぜナラ形式の表現をとるのかという疑問は依然として残るので筆者としては以下、田野村の分類に沿って考察を加えてみたい。

ま　と　め

1．モノナラ文①に関して

モノナラ文①は「う・よう形＋ものなら」という同一の形をとっているが、実は後件に「予想される事態の描写」を述べるものと、「話手の積極的意志を述べるもの」の二つに分類することができる。「予想される事態の描写」を述べる文の多くは、「のなら」で置き換えることができず、「話手の積極的意志を述べるもの」の大部分は「のなら」で置き換えることができる、ということをP127のまとめで指摘した。

モノナラ文①のａ「予想される事態の描写」を述べるものは、

「先月、生命保険文化センターは、幼稚園から大学まで出すと、１人の子供に1000万円必要だと、発表した。地方から東京の私大へ入れて下宿させようものなら、大学の４年間だけで、800万から900万かかる。」（85：4：30朝日新聞　天声人語）の文に見られるように、「地方から東京の私大へ入れて下宿させる」という事態を仮に設定して、この状況の下では「大学の４年間だけで、800万から900万かかる」という必然性を述べている。このことから、田野村言うところの「状況設定の・なら」、つまり、ある事態が実現した状況を仮に設定して、その状況のもとでのことがらを問題にしている「なら」であるといえよう。辞書にみられる「なりゆきが大変なことになる」「結果がよくないことになる」というニュアンスはこの前件を前提とした後

件の発生の意外性（800万から900万かかるという意外性）から生じるでものであろう。

それに対してモノナラ文①のｂ（「うそをつこうものなら、二度と口をきかない。」）は、「うそをつくのなら二度と口をきかない。」とも「うそをつくなら二度と口をきかない。」とも言える文である。この文は前件の状況のもとではいつも後件のようになるという必然性を述べた文ではない。前件と後件の結びつきも話者の経験や知識に裏づけられたものではない。つまり田野村言うところの「状況設定の・なら」ではなく「実のところが～であれば」という意味を表す「実情仮定の・なら」にかなり近い用法になっているといえる。また、この「ものなら」がなぜ辞書記述のようなニュアンスを帯びるかというと、それは前件を前提とした後件の発生の意外性にあるのではなく、聞き手に訴える話者の意志性の強さにあると考えられる。しかし、前述した通り、モノナラ文①の中では、あまり多くない存在であり周辺的な用法であると思われる。

2．モノナラ文②に関して

モノナラ文②は先のP130でも述べたように、ほとんどの場合に「のなら」での言い換えが可能である。文例をみても、「『実のところが～であれば』という、ある実情がどうであるかということについての仮定を表現することを中心的な用法とする」もので、「ある事態が実現した状況を仮に設定してその状況のもとでの事柄を表現している」のではなく、田野村言うところの「実情仮定の・なら」に近い用法であることがわかる。さらに「できるものなら」「やれるものなら」のように、前件に可能の表現をとることから、話者は、聞き手あるいは話題上の人物がある行為を実現する可能性について、強い疑念をもっているといえよう。つまり話者の考えは、「実のところは～ではない」というところにあり、その前件の想定のもとに後件で自分の願望・意志、相手への要求・命令等を言い表しているといえる。前件の成立が否定的な状況のもとで、なおかつ前件成立に対する自己の願望・相手への要求を述べるというところに、この文の表現から感じられる強さの原因があるのではないか。

以上のモノナラ文の考察及び、「のなら・なら」との関係に関して以下のことを論のまとめとしたい。

1．モノナラ文①＝「う・よう形＋モノナラ」は、主に田野村言うところの「状況設定の・なら」の用法を中心的な用法として担うものである。しかしそれのみでははなく、「実情仮定の・なら」の用法も周辺的なものとして存在している。
モノナラ文②＝「可能の表現＋モノナラ」は「実情仮定の・なら」の用法を中心的用法として担うものである。モノナラ文③は「実情仮定の・なら」の用法とほぼ同じものと言えるのではないか。

2．モノナラ文①は「状況設定の・なら」の用法を、モノナラ文②は「実情仮定の・なら」の用法を各々強調する役割をもって存在していると言えるのではないか。なぜならば先に考察のところで述べたように、モノナラ文①のａの場合は、前件と後件の緊密な結びつきを前提として導かれる後件における意外性が、「大変なことになる」という表現上の効果を生み出している。
　また、モノナラ文②の場合、前件の成立に関して疑いをもった（実のところが～ではないのではないかという）状況のもとでの願望や欲求の表現が、話者の願望・意志・要求・命令の度合いを強めるものとなっているといえる。

<注>

（注１）条件表現－ある条件を仮定し、その条件の下で行われる帰結を述べるもの（『日本語の文法 (3)』より・アルク出版）

（注２）前件－条件を表す節（『日本語の文法』より・国立国語研究所）後件－帰結をあらわす節・主節

（注３）中島　悦子（1994）「日中条件表現の対照」『日本語学』vol.13

（注４）・用例のいくつかに関しては（1984）玉村　禎郎「～ものなら」『日本語学特集　複合辞』の用例を参考に原典に当たらせていただいた。

・用例に古いものが多いのは、古い作品の中に、このモノナラ文が比較的多く用いられているからである。

（注５）モノナラ文②の用例はかなり見つかりにくく、モノナラ文①の用例との量的バランスを保つために、作例した。

（注６）久野　　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

（注７）蓮沼　昭子（1985）「ナラとトスレバ」『日本語教育』56

（注８）網浜　信乃（1990）「条件節と理由節－ナラとカラの対比を中心に－」『待兼山論叢　日本語学編』24

（注９）鈴木義和（1993）「ナラ条件文の用法－聞き手との関係を中心に『園田語文』7

（注10）田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ｉ』和泉選書

（外国語留学生指導センター日本語コース委託講師・
筑紫女学園大学非常勤講師）